

「動かないで。せっかくのファースト精子に不純物が混ざったら、成人として認められなくなっちゃうよ」

お兄さんがトリガーを引くと、鋭い水流が僕のおちんちんを容赦なく叩いた。

18年間、誰の手にも触れられなかった尿道が、強い水圧で無理やり決り開かれていく。

「い、痛っっっ」

「その引き攣った顔を逃すな！」

田中のおじさんの叫びとともに、フラッシュが激しく焚かれた。

直樹お兄さんは高圧洗浄スプレーを置くと、次に長く太い精密仕上げ用綿棒を手にとった。

それは殺菌成分を含んだ透明なジェルで、ねっとり湿っている。

「……ひっ、あ……直樹、お兄さん……それ、なにをするの……っ」

彼は、僕のおちんちんをグイと持ち上げ、尿道に綿棒をピタリとあてがった。

「一番汚れが溜まりやすいのは、ここだからね。少し、我慢して。黒岩さん、精通防止キャップが外された今晚からは、このケアを毎日、遥くんに行うようにしてください。最初は慣れずに嫌がるかもしれませんが、そこは心を鬼にして、奥までしっかり広げて洗ってあげてくださいね。1ヶ月もすれば自分からおねだりするようになりますが、医療的ケアなのでほどほどに」

パパが真面目な顔で頷く。

「分かりました。遥、頑張ろうね。このケアも毎晩、全部動画で記録して『精通後のおちんちん成長アルバム』を作ろう。お前が毎晩どれだけ頑張れるか、パパが責任を持って保存してあげるから」

パパのその言葉は、まるで歯磨きや爪切りを教えるような無垢な愛情に満ちていた。

薬液をたっぷり含んだ綿棒が、僕の過敏な粘膜の隙間にねっとり潜り込んでくる。

「ひ……ぎい、あああああ！！ な、なか……入っている……っ♡ 変な、かんじ、するう……っ♡」

田中のおじさんは、綿棒が僕のなかに沈み込み、赤黒い粘膜を押し広げる様子を至近距離から連写し続けている。

「ひ、あ、んっ……やあ、毎日、こんなケア、そんなの……っ♡ ああああああ！！♡」

追い打ちをかけるように、直樹お兄さんは銀色の拡張器具を手にとると、僕の窄まった入り口に容赦なく差し込んだ。

「やだあ！ あ、あああっ！ 壊れる、壊れちゃう……っ♡ ひ、んっ、あああああ！！♡」

金属の冷たさが内側をじりじりと押し広げ、露出したことがない奥の粘膜までが、手術用のライトに真っ赤に照らされる。

無理やり開かれた尿道に、再び冷たい洗浄液が直接注ぎ込まれ、僕は傾斜台の上でガタガタと腰を突き上げた。

「素晴らしい。黒岩さん、見てください。この尿道の収縮、まさに18年間の純潔の証です。これは、区のアーカイブでも最高評価になりますよ」

パパの瞳は、厳しい教師のよう。

その間も直樹お兄さんの手は容赦なく、僕のおちんちんを根本からカリの縁まで、ねつとりと、力強く扱き上げ始めた。

「ひ……ぎい、あぁっ！ あ、あああああぁっ♡」

「ほら、ちゃんと言いなさい。言わなければ、精通は許さないよ。ずっとこのまま寸止めだ」

パパが僕の耳元で残酷に囁くと同時に、直樹お兄さんがピタリと動きを止めた。

最高潮の一步手前で放置される拷問に、僕は傾斜台の上でぴーんと腰を突き出した。

「あ、……あ……っ♡……なおき、おにいさん……っ♡……ぼくの、せいし、を……っ♡全部、全部……のこさず、搾り、出して、ください……っ♡！ あああああああ♡♡」

「よく言えました。じゃあ、直樹くん、遥に最高の精通をさせてやってくれ」

パパの承認が下りた瞬間、直樹お兄さんの指使いが激しくなった。

もうこれは粘膜の蹂躪だ。

お兄さんの指が、根本から先端に向けて、ゆっくりと、肉を押し潰すような力強さで滑り出す。

「ひ、あ、っ……ああああ♡！！」

キャップ越しとは比較にならない、剥き出しの神経を直接かき回されるような感覚に、僕は台の上で背中を反らせ、叫び声を上げた。

「そういえば、お前が生まれた日も、今日みたいな晴れた日だったな」

僕の手首を台に力強く抑え込んだまま、パパが耳元で、うっとりとして昔話を始めた。

「初めてお前のオムツを替えた時、この小さなおちんちんを見て、パパは誓ったんだ。国に命じられた通り、18歳のこの日まで精通を許さず守り抜いてみせるって。ああ、本当によく頑張ったね」

パパの思い出話は、直樹お兄さんの容赦ない愛撫と重なる。

お兄さんの指は、僕のおちんちんを限界まで反り返らせ、一番敏感な場所を爪の先で弾いた。

直樹お兄さんの手つきが、さらに粘り気を帯びたものへと変わった。

僕自身の先走った液が混じり合い始めたせいだ。

動かすたびに「ぐちゃ、ねちゃ」と卑猥な音を立てる。

「……ひっ、ああぁっ♡！ 待って、お兄さん、それ、……そこ、だめえっ♡♡」

「そうか。ここが好きなんだね」

カリの裏側の最も敏感な一点を、お兄さんが執拗に円を描くように抉り始めた。

一気にイかせてくれるのではなく、絶頂の縁で僕を縛り付け、じわじわと責めるつもりらしい。

「いいぞ、その表情だ！ 苦しげに顔を歪めて、でも腰は振ってしまう若者。最高だ！」

田中のおじさんが興奮で声を上ずらせ、レンズを僕の股間ギリギリまで近づける。

カシャカシャという機械的な音が、僕の喘ぎ声と重なり合って精通室を満たしていく。

「見てください。このペニスの角度、最高ですよ！ 搾精されるのを待つて期待に膨らんでいる。先程、あれほど精子を出したばかりなのに、もうこんなに回復して。このペニスは熟した果実のようだ！」

田中のおじさんが、椅子の真ん前でカメラを構え、僕の股間の数センチ先までレンズを突き出してきた。

カシャカシャという連写音が、僕の秘部を直接叩くように響く。

「い、嫌あつ！ そんなの、そんなの言わないで……っ♡」

僕は狂ったように首を振り、拘束された肘掛けをガタガタと鳴らした。

けれど、高く釣り上げられた僕の膝の間からは、羞恥にひくついているアナルが、赤く充血したおちんちんと一緒に、眩しいライトの下で無残に晒されている。

「遥くん、まさか、アナルでも」

「ち、違っ！！」

すると、田中のおじさんが僕をなだめた。

「お尻の穴が感じるのは悪いことじゃない。精子を作るのに奨励されている刺激だ。アナル貫通式のときは、精通式と同じぐらい派手にやろう。パパにしっかりと女の子にしてみえ」

しかし、パパは腕組みして考え込む。

「アナル貫通式、か。最近はそのちもイベントごとなんだね」

「依頼はかなり多いよ。父親が息子を女にするっていうのは、双方の精子造成を助けるから、記念動画に残すだけでなく日常再生用にもしたいっていう父親が増えている。鑑賞会も盛んだね。呼べなかった知り合いを大勢呼んで貫通式を再現するんだ。でも、黒岩さんのはペニスサイズがかなり大きめだから遥くんはしっかり準備をしないと」

「準備段階から泣いてしまうだろうね。指での慣らしすら、この小さいアナルでは……」

「アナルの教育しがいがあるじゃないか。小さいアナルが大人の指で広げられていくのは視覚情報としてとてもいいもんだよ。よし、そこから撮っていこう。撮影価格も相談に乗るし」

「それはありがたい。だが今はまだ、遥かにペニスだけで射精させることを楽しませたいんだ。私のペニスを入れられて前立腺を刺激されてアナルで中イキしながら射精ができて、それは自分の力でした射精じゃないだろ？」

「精通式から数か月、半年後に貫通式をする親子が多いからまだまだ先って考えていい」

「そうか。じゃあ、半年後かな」

「よし来た。仮押さえしておくね」

二人の間で、僕のアナル処女が失われる計画まで勝手に決まってしまった。

——小さいアナルが大人の指で広げられて。

ああ、騒動だけで僕……。

分かっている。

精通式を迎えたら、精子をたくさん造成するのは国民の義務だ。

そのためにはアナルが使われることもあるって授業で少しだけ習った。

それは『高効率搾精演習』という、外部からモデル親子を招いて行われる特別授業だった。

教壇に設置された処置台の上で、全裸の息子役が父親役に抱かれ、クラス全員が見守る中でアナルの開発手順が公開されるのだ。

「いいですか。アナルは排泄器官ではなく、精巣を内側からマッサージするための器官』です」

講師の父親が、苦悶の声を上げる息子の狭い穴に、潤滑剤を塗った指を容赦なく沈めながら淡々と解説する。

「こうして父親の指、あるいはペニスを直接受け入れることで、被験者の造精能力は飛躍的に向上します。これは親しい者同士だからこそ成し得る、最も純粋な社会貢献の形なのです。そして何より、管理者にとっても管理下にある息子の体内へ排出することは、保護者としての造精機能を最も活性化させる最高効率の活動なのです。相互に搾精を助け合うことこそ、この国の健全な家族の姿です」

スライドには、指で真っ赤に広げられたアナルの接写画像と、それによって誘発される

「アナル射精」のメカニズムが図解されていた。

立派なペニスが狭い直腸を突き、前立腺を介して互いの生殖機能を高め合うという相互造精図を、僕はドキドキしながら見つめていた。

クラスの男子たちは皆、真剣な表情でノートに書き留め、僕もまた、いつかパパの太い指やもっと太いペニスに、あんな風に中を搔き回される日が来るのだと、恐ろしさと抗えない昂ぶりを同時に植え付けられていた。

そして今。

皆に取り囲まれる中、パパに貫かれている自分を想像すると、どんどんおちんちんが硬く……。

あくまでも、アナルにおちんちんを入れられるのは、精子の造成のためなのに、こんなことを考えているってバレたら、異常行動とみなされて矯正されてしまうかもしれない。

「ひ、あ、んっ……やぁ、女の子になんて……っ♡ ぼく、男の子なのに……ああああ♡♡♡！！」

パパが、大きく割られた僕の股間の一番柔らかい場所をねっとりと撫で回す。

「遥？ なにをそんなに興奮しているんだい？ おじさんのレンズが、お前が刺激を欲しがっている場所にこんなに近づいているから？」

パパに顎をクイと持ち上げられ、僕は自分の股間を至近距離から狙い撃つ、黒く巨大なレンズと対面させられた。

その鏡のようなレンズの奥に、脚を無様に広げられ、涙と涎で顔をぐちゃぐちゃにして喘いでいる、情けない自分の姿が映っている。

「……あ、……あ……っ♡」

自分が男としての尊厳を剥ぎ取られ、じわじわと雌へと作り替えられていく予感。

その恐ろしい背徳感に、僕の身体は裏腹な反応を示し、一回目の射精を終えたばかりのおちんちんは猛り狂うようにドクドクと脈打ち始めた。

「あ、あ、……っ、パパ、くる……♡！ 精子が！！ 僕、一人で、……いっちゃう、……っ♡！ 一人でいくの、怖い♡」

「大丈夫。一人での射精は怖いものじゃない。そのまま出しなさい。それがお前のおちんちんの自立だ」

「あ……、んっ。自立♡、する。おちんちんで♡、自立っ♡」

「そうだ。これがオナニーの正しいあり方だ。でも、今後、一人でするとしても、必ず誰かに見守られながらするんだよ」

「……はい。あっ、じり、っっ♡♡♡」

自分の指の動きが速くなるにつれ、グチュグチュという卑猥な音がライトの下で響き渡る。

「あ、ああああ……っ♡ だめ、これ、すごい……っ！ じりっ、したがつている、僕の、おちんちんがあっ！！♡」

パパや直樹お兄さん、そしてカメラを構えた田中のおじさんに見守られ、その視線を燃料にするように、僕は狂ったように粘膜を擦り上げた。

三回目。

すでに感覚が麻痺し始めているはずなのに、僕のおちんちんは新たな快楽を溜め込んでいく。

「あ、あああああああ————っ！！♡ ひ、んぎいいっ！ でる、でちゃうう！！♡♡♡」

視界がフラッシュの光で真っ白に染まる。

ドクドクと、僕の意志を無視して三度目の射精。

精子が勢いよく放たれ、僕の指を、そして開脚椅子の金属を白く汚していった。

「はあ、はあ、……っ♡ あ、ああ……っ♡」

「素晴らしい自立だ、遥。田中さん、今の指の動きと、飛び散る瞬間の顔、撮れましたか？」

「もちろんだよ」

「よかった。最高のいき顔が撮れて」

「遥くん！ そのまま、視線だけこっちに頂戴！」

田中のおじさんが、脚立から飛び降りるような勢いで僕の顔面に詰め寄ってきた。

巨大なカメラのレンズが、僕の鼻の先、数センチの距離まで迫る。ガラスの奥で、絞り羽根がカシャカシャと不気味に動き、僕の涙で濡れた瞳を執拗に追いかけてきた。

「ひ……っ、あ♡、……やだ♡、……」

「顔を逸らさないで！ ほら、自分の指で汚したばかりのおちんちんと、その泣き顔を一枚の絵に収めるんだ。スタッフ、下からライトをもう一枚！ 涙の光沢を強調して！」

おじさんの指示で撮影スタッフが僕の顎の下に白いレフ板を差し込み、強烈な光が僕の視界を真っ白に焼き尽くした。

「パパ、……たすけて、……眩しいよお……っ」

僕はたまらずパパに助けを求めた。

「大丈夫だよ、遙。……さあ、手足を伸ばして」
両手両足を大の字に広げられ、冷たいレザーのベルトが手首と足首に食い込む。
「ひ……っ、おしりに支えがなくて、スースーする……っ♡ なに、するの……？」
「これまでは外側からの刺激だったけど、ここからは内側から直接、資源を絞り出すよ。
第7工程、前立腺直接穿孔刺激を開始します」
精通判定員の宣告の後、直樹お兄さんが、ワゴンの上に置かれたマドラーのようなものを手に取った。
それは、細長くしなやかなステンレスの棒で、先端が指先のように丸く膨らんでいる。
「遙くん、これが見えるかな？ これは『公認型前立腺搾精マドラー・極（きわみ）』といってね。君のように、外側からの刺激だけでは精子を出し尽くせなくなった身体のために開発された、特別な魔法の杖なんだ」
お兄さんは、その細長くしなやかなステンレスの棒を、指先でしなりを確認するように弾いた。
金属特有の冷たくて高い音が、静かな室内に響く。
「先端のこの丸い膨らみが、君の身体の奥にある男の聖域。つまり、前立腺を、指よりも正確に、そして執拗に捉えるんだ。ここを直接かき回されるとね、自分の意思なんて何の意味も持たなくなる。お腹の底が熱くなって、頭が真っ白になって、精子を吐き出すだけの機械になっちゃうんだよ」
「ひ……っ♡、あ、やだ……そんなの♡♡、……おしりに、入れるの……♡♡♡？」
僕は泣き叫びながら、X型に開かれた手首のベルトをガタガタと鳴らした。
けれど、逃げられるわけがなかった。
四肢を完全に封じられた僕にできるのは、無様に腰をくねらせて、これから始まるアナルの侵略に怯えることだけだ。
「そうだよ、遙くん。精通式では、身体全部で感度を高めるってことを覚えるんだ。黒岩さん、遙くんの腰をしっかりと押さえつけてください。一番いい角度で前立腺を突いてあげたいから」
「ああ、わかった。遙、大人しくしなさい。直樹くんに身を委ねて」
直樹お兄さんは、マドラーにローションを塗りやる。
やがてそれを、僕のお尻の入り口に押し当てた。
『公認型前立腺搾取マドラー・極』、いくよ」
まず僕に襲ってきたのは、マドラーの凍るような冷たさだった。
18年間、排泄のためだけにしか使ってこなかった閉鎖的な場所に、異物が侵入しようとしている。
「う、ううっ」
「苦しいかな？ アナルをこうやって教育されるの初めてだもんね？」
「遙、力を抜いて。マドラーをお尻で全部、飲み込むって意識して。入れられるんじゃない、飲み込むんだ。お尻で、あーんだよ」
「あーんだなんて、パパ、そんな♡」

